

東京芸術祭ワールドコンペティションに寄せて

《審査基準について》

10年という時間のタームのことを一旦括弧に入れて、様々な場所から訪れた6つの作品を見て一人の観客になる経験から逆に10年後の時間を考えることにしました。

そして、ふたつほど思ったこと。ひとつは、ある〈壊れかた〉ですね。壊れかたの様子。かたちとまではいなくても、壊れていく姿、様子。壊れていくにもかかわらず、生きる、生き伸ばす、生き長らえること。それを抱えている場としての舞台。

もうひとつは演劇という、古くて新しい、決して無くなることのない演劇と観客との関係。いまは観客という言葉もほとんどコラボレーターになりつつありますが、見終わったあと、あるいは見る段階から、見始めたときからのある感覚・感情のあらわれ。人間の感情そのものが変わりつつあって、生きる存在としての人間にどういう感情が残っていて、どういう感情が消えていくのか、舞台はどういうふうにそれと関係性を試みているのか。

『可能性は風景の前で姿を消す』

ある種の「からかい」の感触。冷たい、しかし独特な距離感覚を作るとともに、最終的には避けられない、逃れられないある生々しさを身体に残す舞台でした。表皮と無意識の動きが一瞬のうちにつながっていく、深いところの微妙なずれを、ふざけているような身振りにのせて見せているという意味としてはひじょうに洗練されている。

音響の発明ともいえるジーーーーンという音を出す楽器を舞台前面に配置し、身体を破裂させたいかのように音を繰り返して広げる。人間の耳の道を通して内臓の深いところまで届く、いかなる言葉の群れより強烈な音。ある距離感を具体性に反転させる装置によってイメージが飛躍する。神経線の限界としての耳に触れることによって意識を取り戻すかのような実験が、他の作品にも見

られましたが、この作品は歴史の中に内在された暴力に対する過剰なナレイティブを何重にも捻ることによって、ある悲劇性をほのめかしたという点では、舞台芸術のある〈蓄積〉を実感しました。

『たびたび罪を犯しました』

幽霊たちの、お墓の下に埋もれている、破片的な、まだ声にならない、そういう音のような声のような、それが常に音響で流れている。お墓から蘇ってきた歴史の中の暴力についての語り、それに取り憑いて、望まないメディアになること。そして代わりに伝えないといけないような、そういう役割を果たす。不思議なユーモアのある舞台。ユーモアと日常が自意識を持って戻されるところがある構造になっている。

仮面の美しさはいうまでもなく、仮面を被って変わっていくところは、肉体的、身体性を持って近づいてくるある種の攻撃性、暴力性を生み出す。力強く美しい役者のダンスはあるときは親密感を与えつつも、起きている社会の暴力への問いに連れていく。「あなた誰?」、「私だ」、「罪を犯すものは私である」と。現場のブルキナファソで採った街の音が、なんとも言えないあるリアリティを与えてくれたのが記憶に残っています。何一つ捨てられたものがない、再利用による小道具の発明も、いつでもどこでも行うことのできる演劇の固有の伝統を、死者たちの声を聞くという普遍的なテーマとともに蘇らせたと思います。

『ハウリング・ガールズ』

長い伝統を持つ声の文化、そのディシプリンへの反逆を通じて抑圧された存在への切実な訴えを込めた舞台であったと思います。

死者を葬る意識の中でうねりのような声を出す伝統習慣があるのですが、内臓を破裂させそうな新しい身体への実験が具体的な作曲の行為を通じて実現される。呼吸とうねり。自然の呼吸とは別の〈自然〉を孕んでいるうねりのよう

な、もう一つの声を出すことによって、既存の言葉を錯乱させる新たな声を求める願いの試み。

私たちが普段慣れている身体のことをかなり緻密に計算し、そこに限界を待ってたかのようにあらわれる光は、ある死と生の関係を忍耐強く提示する。まだ人間になっていない、あるいは人間たちを超える動物の未知の身体を備えた女性や子供たちの声に乗せて。

でも、あるところに行きますとある種の祈りのような旋律が、最後の収束に向かって、ゆっくりとして光の変化に従い微かな希望を生み出しつつ、舞台が消えていく。見事な立体的な構造をつくりだす舞台です。

『汝、愛せよ』

見終わったあと残るある悲しみの感触を今でも覚えています。今回の作品全体に流れているのは、無意識的に行われている日常の暴力に何気なく関わっている私たちの姿を見せていることであるように思います。

身近な、思わないところで他者を作りつつ自分を防衛してしまっている私たちの姿。それは植民地主義を含め長い歴史を持っているという、避けられない〈伝統〉を、物語の力を改めて生かして訴えてくる。常に〈敵〉化されながら排除されてきた存在たちが相手たちを敵にしつつも、ともに生き延びる知恵を考え出した長い伝統がある。抑圧されてきた原住民たちの文化から、現在の世界が抱えている様々な暴力性を見つめるすべを学び直す。

トニ・モリスンの小説の『ビラヴド』を少し思い出したりしたのですが、愛するからこそ殺すという、逆説的な。身体に傷を与え、その痛みを体内化していく儀式を通じて、他者の痛みを受け止める可能性を提示する。そして、A sense of shame、ある種の恥の感覚に私たちは晒される。私たちの無意識的に他者を作り出す暴力性を、様々な関係をひとつに束ねてつなげる力のある舞台ですね。

『紫気東来——ビッグ・ナッシング』

何気ない日常のありふれた破片というか、ほとんど使えなくなっている廃品のような懐かしい小道具たちが、見事にある時間性を醸し出しながら舞台の上で存在感を持つ。

影絵芝居の持っている不思議な楽しみは久しぶりの経験で、心地よい時間を過ごしつつも一瞬見ると長い歴史における近代への批評性を含んだ、ゾッとしてくるような場面が目の前で展開していく。その跡を往来する感情の起伏がなんの音もなく描かれている影芝居の影の世界になんともなく吸い込まれてゆく。一人の役者が、影の外の世界では耳慣れない、予想できない音をひとつひとつ作り出しつつ、影の役者になってスクリーンと一緒にいる瞬間は、線的な歴史的な時間を横切って〈今〉になる、ある種の楽しい遊び感覚に包まれる。

言葉なくしても無限に広がる空想や夢の世界を与えてくれる、舞台演劇の大事な〈伝統〉を再創造するかのように見せてくれた舞台でした。

『ソコナイ図』

静かな、しかし雄弁な、舞台芸術の可能性に対する新たな問い。それへのひとつの応答のような舞台でした。

毎日のように知らないところで、あるいは私たちが意識していないところで起きている死の姿。特定の悪などは存在していない、誰も悪者はいない、にもかかわらず見えない、訴えられないある死の姿を、〈表現〉の限界を、自ら遂行した舞台かなあと思いました。

死にゆくこと。その姿、それから自分の選択でありうる意志の領域、それを耐える身体。死んだ後の時間が流れる。死が長く続く。残るのは、残されるのは何か。耐えられないしんどい時間でしたが、ある意味では発見されるまでの時間、計算できない、想像できない時間への暗示。舞台は、ここにいるけれどここにはいない時間、弔えない、弔われることを拒否することの次元に、耳を澄ませてかろうじて聞こえてくるギリギリの音とともに静かに転ずる。

まだ批評の言葉が見つかりません。もう少し待ちたいですね。

（この文章は、観客の前で行った批評会における発言記録を、指定された字数制限に合わせて編集したものです。まだ余韻を抱えたままですが。

偶然のように、23年前に書いた自分のエッセイに対して小さな応答を書かざるをえないことがあって、そのテキストを書くときに23年後の今をどのように想像していたのかなあって思っていたのですが、ちょうどそんなときに今回の批評の依頼を受けました。これからの10年後を想像しながら作品に向きあうということは、もうひとつの難しい作業でした。でも、批評家審査委員を含め、素晴らしい作品たちと出会えたことを心から嬉しく思います。

横山義志さん、ありがとうございました。）

2019年晩秋

李 静和